

子

地域文庫 ぶちいき 地域の町内会、自治会、または人口の都市集中に伴い都市周辺に増加した団地の自治会や集会所を基盤とし集団的に運営される文庫を地域文庫という。個人の責任で運営される家庭文庫と目的・活動形態は同様であるが、場所・運営・経費などの面で、自治会などの補助を受けている点に家庭文庫との差異をみて、地域文庫と呼ばれた。規模も比較的大きく蔵書も図書館からの団体貸出しも含め三〇〇〇〜五〇〇〇冊に及ぶ文庫もある。公共図書館の分室の様相を帯び、分室への転換を要望する声もある。一九八一年の文庫調査によれば、家庭文庫にも、集団運営をし団体貸出しや自治体よりの補助金を受けて、規模も大きく活動形態も同様で家庭・地域と分け難い状況があるので、一括して子ども文庫としたいという意見もある。いずれにせよ、対自治体活動の中で、両文庫関係者の中に市民としての権利意識も育てられて、草の根の民

主義を支える有力な基盤となりつつあるところの一つの意義がみられる。(小河内芳子)

小さな子話 ちいさなこ 小さな子どもの誕生と成長を中心とする一群の昔話。異常誕生譚とか異常成長譚という呼び方もある。『一寸法師』『桃太郎』『瓜子姫』『力太郎』『竹の子童子』『五分次郎』『田螺息子』『蛙髭入』『踵太郎』『竹姫』など我が国の本格昔話または完形昔話の中の中心を成す話群である。彼らは神から授けられた神の申し子であるが、その誕生の仕方はいくつかのタイプがある。踵や脛や指といった身体の一部から生まれたり、時には垢の塊から生まれたりする。また田螺・蝸牛・蛇・蛙といった動物の姿で生まれたり、竹のような植物の中から生まれるものもある。さらに桃や瓜のようなうつつろなものにこもりながら川上から流れてくるという生まれ方もある。小さな子は水界にかかりをもつ水神信仰を背景にして語り継がれた話ではないかといわれている。(吉沢和夫)

崔南善 ナムソン 崔南善 一八九〇〜一九五七 朝鮮の文学・国学・歴史学者。号は六堂。幼時から漢学を修め、一一歳にして『皇城新聞』に『大韓興国策』(一九〇二)などの論文を発表して天才とうたわれた。一九〇四年に朝鮮皇室留学生として日本留学、東京府立第一中学校、早稲田大学に学ぶがいずれも短期で退学。帰国後、青少年向け雑誌『少年』を創刊(〇八)主

宰し新知識の啓蒙普及に努め、自らも新しい形式の詩『海から少年へ』を発表するなど朝鮮近代文学の先駆的役割を果たした。また口伝民話の再話、外国文学の言文一致による翻訳も試み、李光洙とともに一〇年代朝鮮の〈二人文壇時代〉を形成した。一九年の三・一運動に際しては〈独立宣言文〉を起草し、朝鮮民族代表の一人として二年半の刑を宣告されたが、後には朝鮮総督府の「朝鮮史編修委員会」委員として協力、満州建国大学教授などの職につき歴史研究に携わり、四〇年代には朝鮮青年に日本軍への学徒志願兵になることを勧めるなど日本軍国主義に積極的に協力し、反民族行為者と糾弾された。

(李 丞玉)

チエーホフ アントン・ピ Anton Pavlovich Chekhov
一八〇一—一九〇四 ロシアの作家、劇作家。同時代人の生活と精神のゆがみや新世界の探求を小説『官吏の死』(一八八三)など、暗い社会面(九二『六号室』)を暴き、それらの総括を戯曲『三人姉妹』(一九〇一)、『桜の園』(〇四)に展開した。子ども・動物を扱った作品に『子どもたち』(一八八六)、『カシタンカ』(八七)、『額の白い犬』(九五)がある。

(福井研介)

陳伯吹 ホーチンイ
一九〇六— 中国の児童文学者。江蘇省で生まれる。一九二二年から小学校の教師となり、その体験に基づいてルポルタージュ『学校生活記』(二九二七)を発表、創作活動をはじめめる。二八年上海に

流亡、「小学生」や「児童雑誌」を主編するかたわら、多くの作品を著す。中でも童話『少女アリス』(三二)は、国民党の不抵抗主義を風刺した佳作である。抗日戦争中は、桂林など各地を転々としながらも、旺盛な創作意欲をみせ、多くの詩や散文を発表した。四六年、上海に戻り上海児童文学工作者連誼会を組織し、その後、一貫して児童文学の分野で活躍する。彼の児童文学に対する考え方は『児童故事研究』(三二)で明らかのように、西欧流のファンタジーを取り入れるよう主張し、実践した。そのために、六〇年に批判されたが、文革後復活し、現在も上海児童文学界の重鎮として活躍している。代表作としては、理論面では『作家和児童文学』(五七)、『児童文学簡論』(五九)、童話には『空にとぼうとした猫』(五六)、小説には『飛虎隊と野猪隊』(七九)などがある。中でも『飛虎隊と野猪隊』は、文革前に書かれた作品一六編を収めたもので、これにより第二次全国少年児童文学創作の榮譽賞を受賞している。

(君島久子)

鄭寅燮 イチオンソ
정인섭 一九〇五— 韓国の英文学者、児童文学者。慶尚南道蔚州郡に生まれる。早稲田大学英文科、ロンドン大学大学院音声学科卒業。韓国外国語大学大学院長をはじめソウル大学、中央大学などで教授歴任。一九二三年以来「セクトン会」同人。作品には、日本に韓国民話を紹介した『温突夜話』(一

九二七）、『世界文学散考』（六〇）、『セクトン・チョゴリ』（六二）、『雨の音・風の音』（六八）、『韓日・日韓大辞典』（七四）編修など、創作、翻訳が多くある。

（韓丘唐）

知識絵本 ちしき えほん 知識・概念の伝達、認識を主な目的

とし、科学絵本、認識絵本とも呼ばれる。自然や社会の具体的な事物の絵本、文字・数・音の絵本など、科学的な正確さが重視されるが、一貫した物語で科学性をゆがめることなく構成する絵本を、観察絵本と區別して知識絵本とする論もある。絵本の祖とされるコメニウスの『世界図絵』（一六五八）をはじめ、ベルトゥフ『*Bilderbuch* 子どものための絵本』（二七九〇）など、知識絵本は初等教育の教材として主に出されたが、一九三一年創刊の『ペール・カストール叢書』は、子ども自身がストーリーに同化して科学する世界をつくり出し、知識絵本刊行の在り方を示した。日本でも中村惕斎『訓蒙図彙』（一六六六・寛文6）、『庭訓往来絵鈔』（二七一七・享保2）、古川正雄『ちゑのいとぐち』（一八七一・明4）など、教育する立場が濃い。幼稚園教育に沿った絵雑誌「キンダーブック」（一九二七）、フレーベル館は、幼稚園から家庭への販売経路を確保し、広く童画と保育絵本のイメージを固定化し今日に至るが、三七年出版の東京社『小学科学絵本』は、読み物と芸術性を指向し科学絵本の先駆とされる。戦後、日本評

論社『科学の絵本』シリーズ、法政大学出版局『ものなかはどうなっているか』など、海外絵本の活発な紹介は、やがてカストールの流れをくむ知識絵本「かがくのとも」（六八 福音館書店）の発行をみるに至り、昨今は写真絵本の試行も積極的である。

（矢野 有）

チゾン & テイラー Anette Tison & Talus Taylor 合作著者名。チゾンは一九四二年、パリに生まれ、はじめは建築設計士、テイラーは一九三三年、アメリカのサンフランシスコ生まれで、生物学、数学の教師。二人は、偶然にパリの喫茶店で知り合い、いたずら書きを交換しているうちに、合作の童話『バーバパパ』シリーズができあがったといわれる。わたあめから連想した愉快な空想のお化けバーバパパ一家は、自由に変身して窮地を脱したりいたずらをしながら、子どものアイドルになっている。

（末松水海子）

チチノキ 童謡運動誌。一九三〇年（昭5）三月に創刊、三五年までに不定期刊で一九冊を刊行、当初の誌名は「乳樹」だったが五冊目より「チチノキ」と表記された。北原白秋の指導した「赤い鳥童謡会」の若き童謡詩人群のうちから、與田準一、巽聖歌、有賀連など一〇人が集まって創刊、のちに新美南吉、柴野民三、清水たみ子などが加わった。この誌の目的は與田のエッセイ「新しい情操へ」（創刊号）と巽の「叡智主義提言」に明らかで、「赤い鳥」童謡の革新的な復興であり、

当時盛んであったプロレタリア童謡と、ようやく猖獗（しやうけつ）を極めはじめていたレコード童謡とに対する、近代市民的な思想と情感とに立脚する新たにして芸術的な童謡の創造であった。作品として與田の『病氣』、巽の『キリン』など都会的事物を新感覚派スタイルで歌った童謡を生み、近代日本の童謡史に一つの新たな展開をもたらしした。

（矢崎節夫）

茅野雅子（ちの まさこ） 一八八〇—一九四六（明13、昭21） 歌人。本名まさ。『明星』派の歌人茅野蕭々夫人。大阪市に生まれ、一九〇七年日本女子大学国文科卒業。在学中、共著歌集『恋衣』（一九〇五）で歌壇に地位を確立、のちに『金沙集』（一七）を出版。大正中期母校の教授となり、短歌・随想の筆を執った。児童文学にも関心を示し、『金の船』誌などに平明な童謡を試作、童話集『日の出づるまで』（二二）がある。

（滝沢典子）

千葉省三（ちのへ さむらい） 一八九二—一九七五（明25、昭50）

児童文学作家。栃木県河内郡篠井村に生まれるが、小学校長である父の転勤で、今市町に移り、小学校に入学。三年後、上都賀楡木に移る。その転校時のことを書いたのが、『乗合馬車』（一九二九）で、楡木は以降彼の多くの童話の舞台となった。一九〇五年県立宇都宮中学校に進み、『文章世界』誌に歌や文を投稿。卒業後、郷里で三年間代用教員となる。一四年に上京し、『日月社』植竹書院に勤めたのち、『児童雑誌』『コドモ』、『良友』

を刊行していたコドモ社に入る。ここで浜田廣介、*谷まさる、川上四郎らを知る。二〇年には、同社創刊の『童話』の編集に従事、自らも『虎ちゃんの日記』（一九二五）などを発表。廃刊となったのちは、同人誌『童話文学』や『児童文学』に、ユーモア豊かな『鷹の巣とり』（二八）、『シオンベン稲荷』など、多くの短編を発表したが、当時高い評価が得られなかった。この間、童話集『トテ馬車』（一九）、『地蔵さま』（三二）、『竹やぶ』（三八）を刊行。だが三十七年に『児童文学』誌が廃刊してからは、創作を絶ち、信仰生活に入る。省三の児童文学の作品は、主に四つの分野に分かれる。(1)空想的童話は比較的初期に書かれ、『ワンワンもの』がたり（三三）、『機関車と月のはなし』（二五）など、日本の童話に欠けていた豊かな空想やナンセンスをもち込んだ点で注目値する。(2)リアリスティックな童話は戦後になって再評価されたが、土の香りのする郷土性の強い方言調の童話が多く、とくに『虎ちゃんの日記』『鷹の巣とり』『定ちゃんの手紙』『仁兵衛学校』（以上二九）、『シオンベン稲荷』など、子どもの悪童ぶりをユーモラスに描いた短編が優れているが、当時、『文学』でなく、『落語だ』と評された。いずれもありふれた日常生活に生きる子どもたちが生彩をもって描かれており、『けんか』『丑』の作中人物とともに、日本児童文学史上、高く評価されている。外国児童文学にも親し

んだ省三は『トム・ソーヤーの冒険』などを自己の文学の理想とし、その影響も受けたが、マーク・トウェインのような鋭い文明批判や体制批判はなく、あるがままに現実の子どもをみつめ、ひたすら写実した思想なき文学であった点で、トウェインと相異なる。ほかに(3)『無人島漂流記』(二六)などの大衆児童文学、(4)『陸奥の嵐』(二三)のような翻案や再話ものなども手がけているが、ストーリー性が豊かで迫るものもあり、今日的にエンターテインメントの文学として再評価できる一面をも有している。

「虎ちゃんの日記」とらちゃん
のにつき 短編童話。一九二五年作。村童の虎ちゃんを中心に少年たちの夏休みの生活を日記形式で、郷土色豊かに描いた作品。虎ちゃんたちがみつけておいた山ぶどうを源ちゃんたちがこっそり食べてしまったので大喧嘩となり、源ちゃんが怪我をしておしまふ。虎ちゃんの父ちゃんが謝ってくるようにいつけるが、虎ちゃんはその気にならず、大沼の中島へ家出をしていく。そして翌朝父ちゃんに発見される。やがて源ちゃんとも仲直りをし、東京から休みを過ぎしにきていた敬ちゃんたちと一緒に再び中島に出かけることになり、虎ちゃんの夏休みは終わる。

【参考文献】松山雅子『千葉省三』(一九八六 大日本図書)

(原 昌)

ちばてつや 一九三九(昭14) 漫画家。本

名千葉徹弥。東京築地に生まれ、満州に渡った後、一九五八年日大一高校卒業。在学中単行本『復讐のせむし男』(一九五六)を出版。その後『123と456ロク』(六二)、『みそつかす』(六六)などの庶民の生活感あふれる少女漫画や、『ちかいの魔球』(六八)、『紫電改のタカ』(六三)などの男の友情をうたった少年漫画を描き継ぐ。『あしたのジョー』(六八、高森朝雄原作)は大ヒット作となった。(竹内オサム)

千葉春雄 はるお 一八九〇(一九四三(明23)昭18) 国語教育家、編集者。宮城県生まれ。宮城師範卒。東京高師附属小学校訓導時代、『童謡と綴方』(一九〇〇)で主張した文芸教育の重要性や童謡教育論は、保守的な教育陣営からの発言であるだけに大きな意義があった。附属小学校を退き、厚生閣書店に入り雑誌『教育・国語教育』を主宰。独力で東宛書房を創立。前記雑誌や『綴方倶楽部』を刊行。全国の実践家たちの研究成果ならびに児童作品の発表舞台として提供し、綴方運動の活動家を数多く育てた。(鈴木敬司)

チムニク ライナー Reiner Zimnik 一九三〇(ドイツ)の画家、絵本作家。上シュレジア地方ポイテン(現ポーランド領)に生まれ、第二次大戦中に戦火を逃れバリエルンに移る。指物師の修業のちミュンヘンの美術学校を出た。絵本の処女作は『Xaver, der Ringelstecher und das gelbe Ross 輪突きのクサーヴァと黄

色い馬(一九五四)。その後『釣りびとヨナス』(五四)、『クレイン男』(五六)、『タイコたたきの夢』(五八)などの絵物語を次々に制作。いずれも単純明快な筋立ての物語が、ユーモラスなペン画との同時進行によって繰り広げられていく。現代の叙事詩ともいべき黒白の世界である。一九六〇年代以降は『レクトロ物語』(六二)のようにテレビ劇画にも手を染め、また『ピルの風船旅行』(七二)のような彩色絵本をも制作しているが、初期の作品ほどの生彩はみられない。戦後の復興機運と作家自身の青春が幸せな結婚を遂げた稀有の例とみてよいだろう。(矢川澄子)

茶木 滋 ちぎ しのぶ 一九一〇(明治四三) 童謡詩人。本名七郎。神奈川県横須賀市に生まれる。明治薬学専門学校卒業。旧制横須賀中学三年生のころから童謡・童話に関心を寄せ、『赤い鳥』『金の船』『金の星』『童話』などに盛んに投稿した。薬専卒業後も、製薬会社に勤務しながら文筆活動を続け、『コードモノクニ』(一九三三・四)に童謡『とても大きな月だから』が掲載された。その後、『童謡草紙』『童謡新潮』などを経て、小林純一、関英雄、柴野民三らと東京童話作家クラブ(三九)を結成、『童話精神』を創刊し、それに『馬』(四〇・二二)を書いて高い評価を得た。愛唱されている『めだかの学校』は、NHKラジオ「幼児の時間」(五一・三二)に放送されたのだが、この作者のテーマは、この作品に

代表されているように、シャープな観察眼と優しい心によって表現された生命の賛歌である。童話集には、『鮎のお祭り』(四三)、『くろねこミラック』(五七)などがある。(薩摩 忠)

チャーチ リチャード Richard Church 一八九三—一九七二 イギリスの詩人、小説家。長い官吏生活の後、編集者を経て作品を発表。数々の文学賞を受けベッククラブ会長などを歴任。子ども向けに七つの物語を残す。五人の少年が石灰岩の洞窟で迷う『地下の洞穴の冒険』(一九五〇)や、国境の問題を子どもたちと犬の交流を通して描いた『犬のトウビー』、国境の物語(五三)とか、『白い雌鹿』(六八)、『フランス人の副官』(七一)などがある。(藤森かよこ)

チャップブック Chabbook イギリスにおいて一七世紀後半から二〇世紀初頭にかけて流布した庶民を対象として出版された小型の廉価本の総称。一枚の紙の裏表に挿絵入りの木版で印刷したものを、折りたたみ紙版の大小で八、一二、一六、二四ページとさまざまなものができる。文字が読める階層が広がるにつれ、チャップマン(行商人)の手によって全国的に販売された。価格は、一ペニーか半ペニーで、アメリカにも輸出された。一八世紀末には、週刊誌などの印刷物に押され衰退していくが、逆に、子ども向きなのは、ヨークのケンドルーやバンベリのラッシュチャーなど質の高い

ものを出版するところも出てきた。内容は多岐にわたるが、子どもによく読まれたものを分類すると、(1) 世のロマンス、昔話など伝承のもの、(2) ロビンフッドなど伝説や歴史に材をとったもの、(3) 幽霊話や占いの本、(4) 笑い話、ナンセンス、(5) ABC 絵本やつづり字読本など教科書的なもの、(6) 宗教的なものなどである。教育的な子ども本が横行する中で、想像の世界や笑いを温存してきた功績が指摘できる。

チャベック兄弟 キヤベック Bratři Čapkové 兄弟とも

に児童文学の作品でも知られるチェコスロバキアの芸術家。兄のヨゼフ Josef Čapek (一八八七—一九四五) は画家、イラストレーター、美術評論家として有名であり、弟のカレル Karel Čapek (一八九〇—一九三八) は劇作家、小説家、SF作家、エッセイストと多才な活動で知られるジャーナリストである。この両者はいくつもの共同で書いた作品があり、また文をカレルが、イラストをヨゼフが書いたものも多い。ヨゼフはプラハの美術産業専門学校の出身で、その絵は表現主義からキュービズムにまたがり、単純だが力強い作品はユニークである。大人のためのいろいろな作品のほか、児童文学の分野では『こいぬとこねこはゆかいななま』(一九二九) が代表作である。一方、弟のカレルはプラハのカレル大学で哲学を学び、以後生涯を新聞記者として過ごし、その間に文学活動にいそしんだが、多

大な作品はいろいろなジャンルで名作を生み出している。とりわけSF劇『R・U・R (ロックスムのユニバーサル・ロボット)』(二〇)、SF長編『山椒魚戦争』(三六) などが有名である。児童文学の分野では近代的なおとぎ話といわれる『長い長いお医者さんの話』(三二) と、動物のエッセイのうち、『ダーシエンカ』(三三) がよく知られる。この二人の兄弟は進歩的文化人としてナチスに反対し、ヨゼフは第二次大戦終わりの直前、強制収容所で死んだといわれている。

張天翼 テチエンイ 一九〇六—八五 中国の作家、児童文学者。南京に生まれる。中学卒業後、北京大学に入るが、学費が払えず一年で中退、新聞記者や教師などをした。創作に励む。『三日半の夢』(一九二八) が魯迅に認められ「奔流」に掲載されて作家生活に入る。一九三一年、左翼作家連盟に加わり、以後、数多くの作品を発表する。とりわけ抗日戦争中に書かれた『華威先生』(三八) は、戦時下に会議に飛び歩き、現実的な仕事もせずにはばたいている自称愛国者たちを風刺して評判となる。その辛辣な風刺は流麗な筆致と相まって、彼の特徴を成している。また児童文学に関しては『大林と小林』(三三) をはじめとして、一貫して子どもの立場に立った多くの作品を発表する。五二年に書かれた『羅文応の話』では、革命後の新社会の子どもの生活と、そのモラルの在り方を描き第一回児童

文学賞の一等を受賞したが、注目すべきは「人民文学」に連載された『宝のひょうたん』（五七）であった。欲しいものは何でも出してくれる宝のひょうたんを手に入れた少年が、しだいに破滅していき、ついには別れを告げるという物語で、新中国の代表作として脚光を浴びた。その前身と思われるものに『頭をつかわない話』（五六）があり、また童話集『給孩子們』（五九）がある。中国作家協会書記などの要職を歴任し、七八年、児童文学創作座談会では、秀れた文芸作品の必要性を病中文書で呼びかけた。

（君島久子）

中学生全集 （ぜんしゅうけい） 全一〇〇巻。一九五〇―五三年。筑摩書房刊。柳田国男、安倍能成、仁科芳雄監修。子どもから青年へと脱皮しつつある微妙な年ごろに、最良の書物を与え、客観的に広範囲なものから方、確かな人生を歩む能力を養いたいという願いから出版された。作品には串田孫一『世界の思想家』、八田貞義『細菌とのたたかい』、土屋文明『万葉集』、内田清之介『鳥の話』、異聖歌『中学生詩集』などがある。文学・化学・歴史などあらゆる分野の権威者の協力を得て完成された画期的な全集である。（大久保みどり）

中国神話

しんわ

中国は、現在漢民族と五五の少数民族からなる多民族国家で、それぞれの民族が自らの神話を伝えている。ただ、多くの少数民族には文字がなく、また漢民族においても神話を空想や迷信として

退ける傾向があったため、文献上には断片的な形で残り、その他は歴史書などに組み込まれた。神話の代表的なものには、「天地を分けた巨人盤古」（盤古が両手両足で天地を分け、やがて死ぬと死体の各部分が化成して日月や風雲、山川草木に変わる）や、「女媧人を造る」（女神が黄土をこねて人間をつくり、めんどろなで縄を泥にひたして振り回し二種類の人間をつくった）、「羿太陽を射る」（二度に一〇の太陽が出て人々が苦しんでいた時、羿が九つの太陽を射落とす）など、天地創造や人類の起源神話がある。これらにはむしろ現在の少数民族の口頭伝承の中に豊かに伝えられており、雲南省のプーラン族「巨人グミヤー」、イ族「巨人ニジガロ」、ラフ族「チャヌチャベ」、アチャン族「チパマとチミマ」、トウロン族の「土をこねて人をつくる」などがある。少数民族の多くが創世神話をもっており、ナシ族の「人類遷徙記」、イ族「西南彝志」、リス族「創世期」、ミャオ族「洪水伝説」その他がある。豊かな少数民族の伝承をもとにして中国の神話が体系づけられる日もくるだろう。

【参考文献】森三樹三郎『中国古代神話』（一九六九 清水弘文堂）、白川静『中国の神話』（一九七〇 中公文庫）、君島久子『中国の神話』（一九八三 筑摩書房）

（君島久子）

チユコフスキー （チユコフスキ） コルネイ・И Корней Иванович

Дуковский 一八八一―一九六九 ロシア、ソビエトの作家、評論家、児童詩人、文芸学者、翻訳家。本名ニ

クライ・B・コルネイチュコフ。ペテルブルグ(現レニングラード)で生まれ、いわゆる母子家庭に育った。少年時代のつらい体験は自伝的中編小説『銀いろの記章』(一九六二)に詳しい。独学の後、一九〇一年に一九歳でジャーナリストとしてスタートしてから、ヒューマニスティックな文壇の長老として八七歳でこの世を去るまで多岐にわたる分野で活躍した。多くの著書があるが、チェーホフについて終生関心を持ち、また、『*Мачепчмое Херпачоо*』ネクラソフの手法』(五二)ではレーニン賞を受賞した。児童文学と本格的に取り組んだのは、子どもたちのための作品を書くようにとのゴリキーの勧めに応じて初の詩物語『わがまちにやってきた』(二六)を書いてからである。ついで、『*しじい*』『*じい*』『*じい*』『*じい*』、『おわるものバルマレイ』(二五)、『アいたた先生』(二九)など、いずれもわかりやすいことばを用い、リズムカルで、昔話やわらべ唄などの要素を巧みに取り入れた斬新なストーリーのおよそ一五編の詩物語などを発表してソビエト児童文学の基礎づくりに多大な貢献をした。幼児の心理や言語感覚の発達を豊富な例を示しながら分析した名著『二歳から五歳まで』(二八)七〇)は、両親や幼児教育関係者の必読書とされている。

長者伝説

でんせつ
でんせつ

富者にまつわるいい伝え。長者を

(松谷さやか)

主人公とする口承文芸は全国各地にさまざまの形で語り伝えられているが、伝説の場合には切り拓いた水田とか屋敷跡とか、水田が没してできた湖とか、あるいは地名とかというふうにその地方の事物と結びつけて語られ、そのほとんどが、かつてその地方で絶大な富と権力を誇っていた長者がなんらかの理由で衰え滅んだ後に前記したような事物が残されているというふうな言い伝えられている。つまり長者の没落を物語る伝説となつていくものが多い。その没落の原因にはたとえば西の山に傾いた夕陽を長者の権勢にものをいわせて扇で招き返し、広大な水田の田植えを強引に終わらせたために、その罰を受けてやがて没落してしまったというもの(朝日長者・湖山長者)や、あるいは米や餅を粗末に扱ってその罰でやがて滅びたといふ話(坂東長者と粕塚長者)などがある。

長

新太

ちんた
ちんた
一九二七(昭二)

現代日本

(吉沢和夫)

を代表する漫画家、イラストレーター、絵本作家。本名鈴木擘治。東京生まれ。文春漫画賞、講談社出版文化賞絵本賞、小学館絵画賞など受賞も多数。その作風は日本離れたナンセンスを基調としたユーモアあふれる自在なもので、あたかも子どもの目で捉え子どもの手で描いたようなおもむきがあつて、「子供のよう描けるのに八十歳までかかった」というピカソを思わせる。代表作に『ぼくのくれよん』(一九七三)、『はる

ですよ、ふくろうおばさん(七七)、『ちへいせんのみ
 えるところ』(七八)、『キャベツくん』(八〇)、『おなら』
 (八二)などの絵本、『つみつみニャー』(七四)、『ちよび
 ひげらいおん』(七七)などの童話、『怪人じやがいも男』
 (七九)、『ガニマタ博士』(八五)などの漫画集があり、
 子どもの本の挿絵も数多い。『海のビー玉』(六五)では
 エッセイストとしてもまことにユニークな素質をうか
 がわせる。

張天翼(てんていよく) ↓ チャンティエンイ

(今江祥智)

チョンシー ナン Nan Chauncy 一九〇〇〜七〇
 イギリス生まれのオーストラリア児童文学作家。年間
 優秀図書に選ばれた『Tiger in the Bush』やぶの中の
 とら(一九五七)や『南の島の冒険』(六〇)で、彼女は
 写実的な作風をオーストラリア児童文学界に確立、ラ
 イトソンなどの作家に影響を与えた。中でもアポリジ
 ニの苦境を題材とした『Tangara タンガラ』(六〇)は、
 ファンタジーを写実的に描いた成功作として高く評価
 されている。

(越智道雄)

鍾子芒(チンズマン) 一九二二〜七八 中国の児童文学作
 家。本名は楊瑾鍾。原籍は湖南省。南京に生まれる。

中学時代から文才を発揮し、抗日戦争を描いた『逃到
 哪里去』(一九三七)を『中国児童十日刊』に発表する。
 それ以降、毎号彼の小説や童話が掲載される。その後
 新聞記者を経て、一九五六年には上海少年児童出版社

で編集に携わるかたわら多くの作品を著す。心優しい
 くじやくが自分の身を傷つけて人々を救う『くじやく
 の花火』(五七)は読者の心を打つ。ファンタジックな童
 話を書くことでは、第一人者である。

(君島久子)

ちりめん本(ちりめん) 縮緬本。明治中期から昭和にか
 けて流行した絵入り本的一种。英・独・仏などの欧文
 が多く、そのほとんどが木版の和綴じ本である。ここ
 でいう「縮緬」とは、絹製のものではなく、柔らかい
 手触りの「縮緬紙」(別名クレープ紙)に由来している。

印刷ずみの平紙の和紙を縮緬仕立てに加工した後、製
 本したものが、つまり「縮緬本」なのである。しかし
 この種の本で、加工されずに、平紙のまま製本され
 た实例も少なくなかったので、厳密には「欧文草双紙」
 とも呼ぶ方が適切であろう。豪華な色摺りの縮緬本
 を含むそれらの欧文和綴じ本は、日本の昔話と古今の
 名作を海外で普及させる上で相当の役割を果たし、同
 時にまた、国内の外国語教育と古典的昔話の再評価に
 も役立った。東京を始め、大阪と京都でも発行された
 が、明治一八年以来、この分野を代表する出版社とし
 ては、東京の長谷川弘文社が最も名高い。明治三六年
 の末までに、三二種類もの欧文昔話絵本を世に送り、
 『竹取物語』や『孝女白菊の歌』などの翻訳を刊行し
 た。長谷川版の訳書によつては、十数カ国語に重訳さ
 れるものもあつた。海外の出版社と積極的に協力した

長谷川武次郎は、今日、世界的なスケールで活躍する日本の出版業界の先駆者であった。長谷川本の著者や訳者には、たとえば日本における長老派協会の創始者デイビッド・タムソン、学者のチェンバレンやヘボン、アドルフ・グロート、カール・フローレンツ、作家・評論家の小泉八雲らがいた。小林永濯、川端玉章、鈴木華邨、新井芳宗など、当時の著名な画家が挿絵や装丁を担当した。

秦兆陽 チンチャオヤン 一九一六、中国の作家。湖北省に生まれる。一九四六年から創作を開始する。作品には、農村の変化を描いた『幸福』（一九五一）、『農村散記』（五四）、『在田野上前進』（五六）などがある。児童文学としては、五二年児童文学賞第一席となった『ツバメの大旅行』（五〇）がある。これは、はぐれたツバメがガンに助けられ、集団の中で成長していくという物語で、新中国の児童文学に新たな方向性を与える作品となった。

金近 チンチン 一九一五、中国の児童文学作家。本名は金知温。浙江省に生まれ、苦学するが子どものころから児童文学を志す。一九三五年、上海の『児童日報』に就職、三七年『小朋友』に童話を発表する。抗日戦争がはじまり、『児童日報』が停刊、失業して重慶に行く。この時期に一家が離散して残された子や両親に死なれ孤児となった子どもをまのあたりにし、一層

児童文学に邁進することを決意する。四六年に上海に戻り、新聞雑誌に児童文学を発表、四七年には児童読物工作者連誼会理事となり、以後児童文学に専念する。四九年には文学工作者協会児童文学組の副組長、五七年には中国作家協会浙江分会副主席となり、児童文学の旗手として活躍している。創作は詩、童話、評論、小説など多方面に及び、代表作には『春むすめと雪じいさん』（一九五九）、『きつねに打たれた狩人』（六三）、『春風の童話』（七九）、評論集『童話創作及其他』（五七）などがあり、現在、『児童文学』の主編でもある。

陳伯吹 チンポーチユイ

（君島久子）

秦牧 チンポーチユイ 一九一九、中国の作家。広東省の人。本名林覚夫。少年時代をシンガポールで過ごし、一九三二年帰国。新中国成立後は広州にとどまり、現在、広東省文連副主席、作家協会広東分会副主席、「作品」副編集長として活躍している。創作は散文、小説、評論など多方面に及ぶが、華僑の生活を描いた小説『黄金海岸』（一九五六）は、各地でラジオ放送され好評を博した。また児童文学では『帰国』（五六）、『蜜蜂と地球』（五七）、『巨手』（七九）などがある。

（中島久美子）